

第3回国際協同組合サミットに参加して

理事研究員 高島 浩

2016年10月、カナダのケベックシティにおいて、2年ぶりの国際協同組合サミットが開催された。12年の国連の国際協同組合年に1回目が開催され、今回が3回目となった。今回のサミットには世界100か国以上の協同組合関係者3千人弱が参加し、4日間にわたり講演会、パネルディスカッション、研究発表等が行われた。

JAグループからは、全中奥野会長、JAふくしま未来菅野組合長、農林中金奥専務らがパネリストとして参加し、JAグループの社会・地域における貢献について発表を行った。



全中奥野会長 左から2番目



JAふくしま未来菅野組合長 左から2番目

1 国際協同組合サミットのテーマ

今回のサミットは、協同組合が社会の諸課題や新たなビジネス環境の変化に対して「行動する能力」を有し、ビジネスの機会を拡大しながら経済力をつけ、国連が掲げる人間・地球および繁栄のための行動目標である「持続可能な開発目標」に貢献できるかがテーマとなった。

2 スティグリッツ教授の問題提起

サミットの基調講演では、ノーベル経済学賞を受賞したコロンビア大学のスティグリッツ教授が格差社会について講演を行った。スティグリッツ教授は、市場経済の進展と80年代以降の米国政治が米国における経済格差の拡大を助長したとし、上位1%への富の集中と下位90%の所得の低迷を指摘。特に、家計の平均所得は2000年以降低迷し、社会活動へのアクセスや機会の不平等が発生、政治・経済の仕組みへの国民の不信感が高まっているとした。そのうえで、非営利団体などの代替組織から学び、連帯と社会的な公平の観点から経済がすべての人々に有益な社会を構築する必要があると講演した。

3 国際協同組合年以降の取組みと今後の課題

今回発表された調査によると、世界に160万ある協同組合では13億人の組合員を有し、2.5億人を雇用、世界売上高の15%を占めるまでに成長している。国際協同組合同盟(以下「ICA」)は、国際協同組合年にICAが掲げた「協同組合の10年に向けたブループリント」がここ5

年間で順調に進捗し、協同組合が持続可能なビジネスモデルとして認知されていると評価した。一方で、若者の参加を増やすためには、ブランド力の一層の強化が必要であるとした。

世界は、環境劣化、不安定な金融市場、格差の拡大、若者の失業、政治および経済組織への信頼喪失といった課題を抱えているなか、協同組合への関心が高まりつつある。今回のサミットの複数の議論においても、参加者から協同組合は課題に対して着実に実績を出しつつあるとの意見が大宗を占めた。ただし、さらに大きく進展するためには、協同組合の価値観を多くの人々に理解してもらうための努力を継続する必要がある、ソーシャルメディア等を通じた価値観に共感を得る取組みがますます求められているとの意見が出されている。

4 JAグループからの情報発信

JAグループも、サミットの複数のセッションでパネルディスカッションに参加している。

全中奥野会長は、「実体経済における協同組合の役割」についてのパネルディスカッションにおいて、JAが総合事業を行うなかで、地域の人々の生活に必要なことを行い、地域発展に貢献していることを披露した。

また、JAふくしま未来の菅野組合長は、「災害復興における協同組合の役割」のパネルディスカッションで、東日本大震災におけるJAの支援の取組みについてその経験を紹介した。

JAバンクについては、農林中金奥専務が農業成長産業化・地域創生にかかる取組みについてプレゼンテーションを行い、各地のJAにおける具体的な取組事例の紹介を行った。

5 世界が注目する協同組合

今回の大会宣言では、2030年までに協同組



農林中金奥専務 右

合が、400万組合、20億人の組合員で、世界の売上高の20%を占める存在にまで成長するとの意欲的な目標が示された。そのため、食の安全等の世界が抱える問題への協同組合としての力量をさらに発揮する取組みを強化するとした。

くしくも、昨年11月の米国大統領選挙では反グローバリゼーションを訴えたトランプ氏が次期大統領に選出された。この背景には、格差の拡大やグローバリゼーションがもたらす負の影響が、従来の政治経済のシステムにおいて十分に対応できていなかったことがあり、世界は新たなモデルを求めている。

今回のサミットを通じて、民主的な組織である協同組合は、世界が抱える問題のひとつの解決策になり得るとし、世界が新たなモデルを検討する際の選択肢になることが示された。

しかし、世論が協同組合に対して必ずしも好意的であるとは限らない。「協同組合ブループリント」もこうした世論を反映して作成されたものである。大会を通じて、協同組合は現状に甘んじることなく、いかに社会に貢献できるのかを真摯に検討し、アピールすることが重要であることを改めて実感した。

(たかしま ひろし)